授業時間外学修の増加と自学自修を促すための授業ガイドライン

令和元年12月
徳島大学大学教育委員会

徳島大学では各学部等における教育理念や目標に応じて授業が展開されており，学生は授業を通して，幅広い知識や汎用的技能等を修得し，さらに，倫理観や諸問題に対応できる力等を身に付けつつあります。しかしながら，学内アンケートでは，自学自修にかける時間が短いとの結果があり，自主的に学修や研究を遂行できる学生を育てる必要性に加え，単位の実質化（授業外学修時間を含めた総学修時間数の確保）の点からも，学生の自学自修時間を伸ばす試みは大学の教育の質を高めるうえで重要な課題と言えます。

これらの課題・問題に鑑み，大学教育委員会では自学自修を促すための授業ガイドラインを作成することとしました。自学自修は，本来，自主的な学修と捉えるべきですが，学生の主体的な学修を引き出す第一段階として，宿題・課題等を含む授業外学修時間の増加が重要であると考えられます。そこで，本委員会では授業時間外学修・自学自修の多い授業について調査し，工夫点や共通項を整理した本学の事例に加え，教育に関する研究事例も参考に授業時間外学修時間の増加を促す手立てを整理し，加えて自主的な自学自修を促すことに寄与すると考えられるヒントを付記し，本ガイドラインを作成しました。

本ガイドラインを作成するための調査結果では，基礎科目と応用科目で大きな差異が見受けられませんでしたが，実施例では基礎科目と応用（探求的）科目に分けて記載しています。また，大学院科目に対しては，応用科目の例がより適していると想定されます。それぞれの授業科目の参考としてください。

このガイドラインにより，学生の授業時間外学修が増加し，ひいては自学自修の促進につながることを期待します。

1）予習・復習（授業時間外学修）に関する情報のシラバスへの記載

2）宿題・課題
- 2－1　課題目的の明確化
- 2－2　課題への取り組み方（グループワーク）の選択
- 2－3　難易度
- 2－4　課題へのフィードバック

3）授業形態・授業での工夫
- 3－1　発表・ディスカッションの実施
- 3－2　プロジェクトや調査の実施
- 3－3　授業内での演習課題
- 3－4　授業での実験実習
- 3－5　小テスト課題
- 3－6　ＩＣＴの活用
- 3－7　オフィスアワーの活用・電子メール等による質問の受付
- 3－8　学修環境の整備・充実

4）その他
- 4－1　授業外学修の意識化
- 4－2　徳島大学の CAP 制
- 4－3　過去のアンケート結果の紹介
- 4－4　教育調査研究から

5）自学自修を促すヒント
- 5－1　自律的にやる気を高める方略
- 5－2　授業の難易度
- 5－3　課題の自由度
- 5－4　ルーブリック評価の導入

1）予習・復習（授業時間外学修）に関する情報のシラバスへの記載

授業内容の理解を促進させるために，予習・復習の必要性をシラバスに記載することで自学自修の取り組みが増加することが期待される。また，単位修得のためには，授業内での学修のみならず，授業時間外での学修が必須であることの周知にもつながる。

大学教育委員会制定のシラバス作成ガイドラインの「授業計画」において，「各回の授業内容に応じた予習復習が具体的に明示されている」ことが求められ具体例が示されているので参考となる。

例：「指定した教科書の〇〇を事前に読んでおく」
「この回の授業終了時に示す課題についてレポートを作成する」等

なお，「準備学修（予習・復習）等の内容と分量」の記載が義務化されている大学が増加しつつあり，授業時間外学修の記載が徹底されつつある。

実践例　教職教育センター　教職科目
自分の指導案立案，授業実践に向けて，学んだ理論を授業中で紹介する具体的授業事例と重ねて復習するよう促し，シラバスにも明記している。

2）宿題・課題

宿題・課題を多く課すと当然，授業時間外学修は増加するが，毎回，学生が嫌悪感を示すくらいの難易度の高い課題をたくさん課してしまうと，学生のやる気をそぐことになり，宿題をやらないだけでなく，授業を休みがちになり，最悪，履修を断念することにもなり兼ねない。そこで，「適切な宿題・課題」に関するポイントを下記に示す。

2-1）課題目的の明確化：

学生のモチベーションを下げないために，多量の課題や難しい課題に対しては，その目的を受講生に明確に伝えておくことが重要であるとの意見が多く得られた。

以下，調査で実際に挙がった意見・取り組みを示す。

- 学生のモチベーションを下げないように，たくさんの課題を与えられる理由，それぞれの課題を行う意味などを明確に説明する。
（例えば，資格・語学検定試験にどう活用されるか）
- 授業中だけではこなせない課題を与えて，かつその課題への取り組みが成績評価に大きく影響することを明示（40%くらい）
- 授業内の演習課題を踏まえた応用課題を宿題として，毎回の提出を義務づけている。この提出物に点数を付け，合算して成績評価するので，出席だけでは単位を取得できない。そのため，受講生もしっかり（やむを得ず？）取り組むのだと考えている。
- 限られた分野の応用科目であり，課題が卒業論文や卒業後の進路等にも関係することを明示するため，受講者の意識が高い。課題がたくさん与えられることを学生が納得または覚悟して受講している。
- 卒業論文に直結する科目であり，予習復習の必要性をほぼ毎回説明している。

2-2）課題への取り組み方（グループワーク）の選択：

個人での取り組みだけでなく，グループ活動を認め，受講生同士での話し合い・教えあいを含む協働課題を課すことで，積極的に取り組みが遂行される例が報告されている。また，グループによる発表を課す授業（3-1 参照）では，協働で学修する機会が増え，より授業時間外学修が増加する傾向にあると考えられる。

実践例 1　演習＿創作系科目

グループワークによる制作で，自宅にあるものを活用するなどした課題を設定し友人と楽しみながら制作できるものにしている。

実践例 2　演習＿社会系科目

宿題・課題の取り組みに際しグループワークを認める。

2-3）難易度：

無難な課題から始めて，難易度が学生の力量より少し高めの課題へと段階的にシフトすると，学生のモチベーションが維持され効果的であると考えられる。

実践例　演習＿社会系科目

史料の判読内容課題を設問形式で 10 ～ 20 問課し，15 回中に 3 回の提出を計画し段々設問数を増やした。宿題を解答するために読まねばならない史料の分量は，受講生の力量を少し上回る程度に設定した。

2-4) 課題へのフィードバック：

学生からの課題の提出があった際に，フィードバックを行うことで，学ぶ意欲の減退を防ぐ効果があるとされている。

実践例 1　基礎＿工学系科目

課題，レポートにコメントして返却している。

実践例 2　演習＿化学系科目

レポートに関して面談を行っている。

※特に，レポートや課題の提出後，時間をおかずにフィードバックすることがより効果的であるとされている。ただし，大人数授業で即時フィードバックが困難な場合には下記のような手段も有効であるとされる（名古屋大学より）。

・課題を回収したら，ただちに模範解答を配付する。
・次回の授業で，課題の中の特徴的な見解や誤解についてコメントする。
・授業開始時に課題を回収し，授業の中で解答を検討する。
・学生のよくできた答案・論文を掲示，授業のホームページにアップロード，印刷・配付などしてクラスに紹介する。

3）授業形態・授業での工夫

この項では，授業時間外学修の増加につながりそうな授業形態・取り組みを紹介する。アクティブラーニング・反転授業の活用が多くあり，それらの授業形態に一工夫加えることが効果的とされる。

3-1) 発表・ディスカッションの実施：

必然的に，準備として発表･発話内容の吟味，整理，発表資料の作成，予行演習等がなされ，時間外学修が増加する。また，発表に対してのコメントを受講生からも集め，次週にフィードバックを課すことで，発表の実施のみで終わらずに，復習にもつながる。

実践例 1　演習＿語学関連科目

受講生に毎回演習内容について英語でのディスカッションを課す。その準備として，英語のスクリプトと音声を事前に配付し，それらを予習しておかないと，そもそも授業に参加できない仕組みにしている。ディスカッションに必要な単語集も事前に渡し，それらを消化（英語で理解し，かつ説明できるように）しておくことがディスカッションに参加する必須の要件としている。

実践例 2　演習＿社会科学科目

専門書の講読を行い，受講生をグループに分け，発表会を 3 回実施。ドラマ作成や論文作成を課す作業をすることで，課題＋αの学修が必要となる。

実践例 3　基礎＿教養教育情報系

人数が多い基礎的授業であっても，大人数双方向型授業「橋本メソッド」（チーム制による本格討論型授業）の導入により，授業外学修時間が伸びた教育実践報告がある（吉田･金西，2012）。

3-2) プロジェクトや調査の実施：

実践例 1　演習＿デザイン系科目

少人数グループで自主的にプロジェクトを企画提案し，専門的な知識及び技術を用いて解決方法を見出す演習である。

実践例 2　演習＿機械科学

グループ毎に課題を与え，それを製作するプロジェクトを実施している。中間発表や発表会において，プレゼンテーションと実物展示を行っている。この結果，講義時間だけでは作業時間が足りないため，時間外（課外）学修が多くなっていると思われる。

実践例 3　基礎＿心理学系科目

３～４名で班を構成して，ミニ調査を実施しており，計画，実施，データ整理，分析，報告書の作成という一連の過程を前期（計画）・後期（実施，データ整理，分析，報告書の作成）をまたいで行っている。そのため，授業時間中に終わらない部分を授業外の時間を使って行う必要がある。

3-3）授業内での演習課題：

予習復習に繋がる演習課題の工夫の例を示す。

実践例 1　基礎＿情報系

毎回の講義の最後に演習問題を課している。講義資料や演習問題は「manaba」に掲載しており，演習問題に正解した受講生から退出可能にしている。昼前の講義ということもあり，早く退出して昼食を並ばずにゆっくり食べたい学生は予習して，事前に演習問題を解いて来る学生も多い模様である。

実践例 2　基礎＿情報系

ほぼ毎回，演習課題を課す。授業によっては順番に割り当て黒板に解答を書かせる。もしくは，早い者勝ちで解答を書かせる。演習課題は予習している者が有利になる。正答は平常点に＋αする。無断欠席すると演習課題の割り当てはなし。

実践例３　応用＿数理科学系

授業内での演習結果の説明が不十分な学生には再度の取り組みを求めている。

3-4) 授業での実験実習：

実験実習による授業時間外学修増加について，教養教育院から報告されている。

報告例　授業時間において実験を行い，そのレポートを提出する授業の時間外学修が上位を占めた。これは，座学の講義で学修した成果をまとめるという作業も含まれるため，総合的な学修を行う必要があり，また個々の実験結果がそれぞれ異なるために，その実験結果をそれぞれが考える必要があるためだと考えられる。
（教養教育＿実験科目）（基礎＿教養教育基盤基礎）

3-5)（毎回）小テストを課す：

授業で実施した内容の小テストを次週に課すことで，授業内容の定着が促進される。また，その日の授業内容をあらかじめ示し，その内容の小テストを課すことで予習が図られ，授業の理解を促す狙いで実施することもある。

実践例 1　基礎＿語学科目

毎回，語彙と文法の復習のための小テストを課す他，学期の中間と期末でリスニングと内容理解の復習テストを課している。かつ，小テストの成績が全体の評価に直結することを学生に周知している。

実践例 2　基礎＿心理学系科目

学期内に３回の小テストを組み込んでいるのでその準備のために授業外学修が増えていると思われる。小テストでカバーする範囲を前もって知らせているので，学生は授業外学修を行って準備することができる。

3-6a）ICT の活用 1：資料・教材の配付：

資料・教材を早めに学生に配付しておくことで自学自修を促すとの報告がある。その資料を web ストレージ等にアップしておくことで，学生がいつでもアクセスし予習・復習に活用できるようになる。学生は資料の内容を吟味する時間的余裕が生まれ，自分が興味を持った場合や「難しそうだな」と感じた際には，時間をかけて予習をすることに繋がる。また，授業で学生の理解が不十分であった箇所を補充した復習用の資料を，授業後時間をおかずに学生に入手させることも容易となり，効果的な復習材料を即座に提供することが可能となる。

実践例 1　教職科目

授業実践に役立つ動画を教職教育センターで web 上にアップしており，授業中には十分触れることができない指導技術についての動画であることを説明して視聴するよう促している。

実践例 2　応用＿情報系

講義資料を 1 週間前から公開した上で，次週の予告（予習のポイントの説明）をする。

実践例 3　基礎＿化学系

manaba（徳島大学 e-learning system）を活用し，自主学習しやすいように自習書やレポート作成例やプレゼン例などをアップロードしており，それを学生たちに紹介している。

3-6b）ICT の活用 2：授業・課題にスマホ・デジタル教材を活用する：

年次が低い学生ほど，パソコンを使用する経験が浅く，資料等のやり取りをパソコンですることが「難しくてできない」，「面倒だ」となる場合があり，自主的な学修が阻害される遠因となり得る可能性が指摘される（田中，2016）。従って，スマホにより上項で触れたような資料のダウンロードができる，また，デジタル教材（アプリ）を用いた小テスト・問題を解くことが可能であると，PC 環境がなくとも学修が可能となり，時間・場所の制約が減少する。

実践例 1　演習＿社会創成科目

クラウド環境・SNS を活用し授業外でも制作したい内容への対応をおこなっている。特別な機材をつかわず個人のスマホを活用して制作できる課題にしている (BYOD)。

3-7）オフィスアワーの活用・電子メール等による質問の受付：

学生に対して，授業以外の場面での質問等を受け付けることが可能であることを示しておくと，授業中では手を挙げて質問することが苦手な学生も，比較的気楽にまた授業とは異なる雰囲気で質問・相談できるようになり，積極的に質問しにきたり，学習の補助や助言を求めることが増えることが期待されている（田中，2016）。

3-8）学修環境の整備・充実：

自学自修・授業時間外学修のため，学内環境の整備も重要であると考えられる。

実践例 1　応用＿情報系

マイコンや主な電子部品を買い取りにして，いつでも実験できるようにしている。ネットワークやスペックが整った電算室を年中無休（5 時から 22 時まで）で開放している。

4）その他

4-1）授業外学修の意識化：

学生に授業外学修時間の振り返りを求める実践例を下記に示す。

実践例 1　基礎＿自然科学系
　毎回，授業時間外の学修時間を報告してもらっているので，そのことも少しは学生の意識づけになっているように思われる。

4-2）徳島大学の CAP 制：

履修登録の際に徳島大における CAP 制の取り組みを学生に周知することで，授業外学修時間を考慮した履修・単位修得を心がけることを促す。

総合科学部例（履修の手引きより　以下同様）：
　履修する科目が多すぎると学修時間や内容が不十分になるので，履修登録できる授業の単位数に上限を設けている。きちんと履修計画を立てて，学びたい授業をじっくり選びしっかり勉強して単位を修得する必要がある。

医学部例：大学では，１単位を修得するために，教員が教室等で授業を行う時間に加え，学生が予習や復習など教室外において学修する時間の合計で，45 時間の学修を要する。学修時間を確保し，授業で学んだ内容を深く身につけること，また，単位の実質化を図ること等といった観点から，本学では，履修科目の登録の上限を定めている。

歯学部例：履修科目数上限制が設けられている。

薬学部例：履修科目の上限単位数は 1，2 年次では半期 24 単位までとする。

理工学部例：履修上限について授業の予習・復習は必要であり，その時間を十分確保するために履修登録の上限の設定が有効である。

生物資源産業学部例：履修科目数上限制について予習，復習も含めた学修時間の確保と教育の質保証のため，各学期で履修登録可能な単位数の上限を 24 単位とする。

4-3）過去のアンケート結果の紹介：

当該科目の受講にあたり，過去のアンケート結果から過去の受講生の授業外時間学修における取り組みを紹介すると，授業外時間学修の目安が周知されると考えられる。

実践例 1　基礎＿電気系
　過去のアンケート回答で「演習問題を真面目に取り組んで練習すればするほど点数が上がりました」という過去のアンケート回答例を紹介している。

4-4）教育調査研究から（吉田・戸川・金西，2011）：

ここまでに記載した内容と重複するものもあるが，吉田ら（2011）による教育調査研究では，授業外学修を行う要因として下記が挙げられている。

- 授業内容レベル…学生が少し難しいと思うレベルに設定。
  授業中に理解できた場合，授業外学修につながりにくい。
- 課題…少し難しいレベルの問題を適度な量課す。
- 教材・資料…早めの配付。予習ポイントや勉強方法の明示も有効。
- 学生同士の関係構築…学生同士で考える時間を設ける。
- 学生が主体的に取り組む授業設計…授業に対する準備を行い，その内容を授業中に発言しなければならない場合。

5）自学自修を促すヒント

前項まで示した授業時間外学修を増加させる方略と実践例を応用することで，自発的な自学自修を促すことが可能であるが，本項では，学生の自主的な自学自修を促すヒントを示す。課題や宿題による授業外学修時間が定着・増加した後に試みると，より効果的に自学自修時間の増加につながると考えられる。

5-1）自律的にやる気を高める方略：

学生に自学自修を促す最も重要な点は，学生の自学自修に対する動機づけを引き起こし，自発的に学修させることである。梅本・田中（2017）によると，「学習の内容が将来の役に立つと考える」といった自律的にやる気を高める方略や，「授業外学修で学ぶ内容は，私にとって大切である」といった価値観が自律的な学修を進めるための重要な要因とされている。

2-1）では「課題に対する目的の明確化」を示したが，これを応用し，時間外の自主的な学修の重要性を明示することが最初のステップとして必要であると考えられる。具体的には，「試験範囲に含まれる」などでも良いが，高学年であれば，「卒業研究を実施するために必要な内容」「国家試験・資格試験に頻出の領域」「将来，専門家として求められる知識・スキル」等の強調をすることで自発的な学修のきっかけとなることが期待される。

5-2）授業の難易度（吉田ら，2011 より）：

4-4）に示したように，少し難しいレベルの授業の難易度が自発的な学修に繋がる。

予習面：「授業資料を web 上で確認し，授業の内容が難しそうである」場合に，宿題がなくとも自発的な授業外学修が促進されている。

復習面：難しい授業後には，「難しかったから」「理解できなかったから」との理由で，自学自修が生じると報告されている。

※授業内容の理解度に合わせて，自宅での学修量を決める方略もある（湊原，2017）。

5-3）課題の自由度：

課題・宿題により授業時間外学修は増加する。そこで，宿題・課題を自主的な自学自修に繋げられると効果的である。ただし，調査研究において，「資料がないと何を勉強してよいかわからない」（吉田ら, 2011）や「自由課題よりも決まった課題が与えられる方が良い」（湊原，2017）との学生の主張が報告されている。すなわち，何の資料も指示もなく，自主的に学修をせよ，と言っても学生は混乱する。そこで，課題や宿題の自由度を段階的に高めることで自主的な学修を促す試みがある。

例：授業開始後数回（第 1 ～ 5 回程度）：明確な課題を示した宿題

授業中盤（第 6 ～10回程度）：具体的な宿題を課すのではなく，文献や資料の紹介に留め，自由な課題を設定させて宿題とする

授業終盤（第11～15回程度）：自由な自学自修

（ただし，学修時間の確保の点で成果や報告を求める場合も）

なお，期末試験等の成績評価に大きく影響する事象と自学自修との関連性をもたせることで学修の促進が期待される。また，シラバスに自学自修に関して記載しておくことで，自主的な学修が必要であることが学生により伝わることが期待される。

5-4）ルーブリック評価の導入：

ルーブリックは学生に与える課題を構成する要素ごとに，評価の基準を説明するものであるが（田中，2016），ルーブリックの基準を適切な段階で開示することで，どういった基準をどのようにクリアするかを学生自身が自主的に考え，再度課題等に取り組み直すことがある，との報告があり，自学自修に適用できる可能性がある。

最後に

今回のガイドラインは徳島大学において，予習・復習，授業外学修時間が多い授業における方略や授業形態，また，学生の自学自修を促進させるためのヒントをまとめました。今回のガイドラインに挙げた方略により，学生の自学自修への取り組みが促され，学生の動機づけを高めることにつながれば，より高い学修効果が期待されます。先生方の今後の授業展開に役立つガイドラインとなることを期待します。また，調査にご協力いただきました先生方や，ガイドライン作成に関わった佐藤裕委員長をはじめとする教育の質に関する専門委員会の先生方にお礼申し上げます。

参考・引用文献等

梅本貴豊・田中健史朗（2017）「授業外学習における動機づけ調整方略，動機づけ要因と学習行動の関連」心理学研究，88，86-92.

田中有紀（2016）「学生の自主的な学修を促す仕組みづくり」 大学時報，370，98-101.

名古屋大学「授業の基本　7 章　授業時間外の学修を促す」 http://www.cshe.nagoya-u.ac.jp/tips/basics/support/index.html

湊原哲也（2017）『「授業時間外の学修を必須とする科目」における自己学習を促す取り組み　－制御工学 I を題材として－』津山高専紀要，59，79-84.

吉田　博・金西計英（2012）「学生の授業外学習を促進する授業　－ 2 年にわたる授業実践を通して－」大学教育研究ジャーナル，9，1-10.

吉田　博・戸川　聡・金西計英（2011）「大学の授業における学生が授業外学習を行う要因」日本教育工学会論文誌，35，153-156.

授業のチェック及び振り返り

徳島大学　FD 委員会

1．趣旨・意義

徳島大学では，主体的に学修や研究を遂行できる学生を育成し，学生の学修成果を向上させることを目的として，2019 年 9 月 18 日の大学教育委員会において「自学自修を促すための授業ガイドライン」を定めています。本ガイドラインは，本学において，学生の授業外学修時間・自学自修の多い授業について調査し，工夫していると思われる点や共有項を整理したデータをもとに作成しています。学生の自学自修を促進することは，単位の実質化の観点からも重要な問題であり，大学教育における課題といえます。

「授業のチェック及び振り返り」は，各担当教員が「自学自修を促すための授業ガイドライン」を参考にして，自身の授業実践を振り返り，成果や課題を明確にした上で，次年度以降の授業計画の作成に活かすことを目的としています。本取り組みは, 2018 年 11 月に大学教育委員会において策定された「教育の内部質保証に関する方針」の３－（２）－イ．に明記されている「授業評価及び授業改善」に該当し，徳島大学における FD 活動に該当します。

2．対　象　者

自身の担当授業について「授業のチェック及び振り返り」の実施を希望する教員

3．効果・利点

- 学生の主体的な学修を促すという観点から，自身の授業をチェックすることができ，履修学生の学修効果を高めることができる
- 日常的な授業の実践を振り返る機会となり，うまくいっている点や課題を可視化することができる
- 「授業のチェック及び振り返り」シートを全学 FD 委員会に提出することで，当該年度の FD に参加したとみなされる

4．内　　容

学生の自学自修を促すために授業の中で取り組んでいることを「自学自修を促すための授業ガイドライン」をもとに作成したチェックリストで確認してみましょう。続いて，自身の授業実践を振り返り，次年度以降の改善計画について記述します。**具体的には，「授業のチェック及び振り返り」シート**をご確認ください。

5．振り返りの報告手順

自身の担当する授業において「授業のチェック及び振り返り」を行い全学 FD 委員会に報告する方法は，次の 2 通りの方法があります。なお，所属する学部の FD 委員会にも報告を行います。

(1)　web 上の専用フォームに入力する

「授業のチェック及び振り返り」報告フォームに，「授業のチェック及び振り返り」シートの内容を入力し送信してください。なお, 本フォームでは, 受付完了の自動メールは送信されません。入力後一週間程度の間に確認が取れ次第，入力内容を pdf ファイルにまとめて記載されたメールアドレスに連絡致します。

「授業のチェック及び振り返り」報告フォームは，高等教育研究センター教育改革推進部門ホームページ, または右の QR コードからご確認ください。

https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=pMNxhjhF9keHFxah1rDKmPrCmisVRvxNtMrWUv7kAJZUNzVaSjgxRIBVRDBTWkROOTBVWUY3T1NUSy4u

(2)　報告様式を添付してメールで送付する

「授業のチェック及び振り返り」シートに記入し，下記の提出先へ報告様式を添付してメールで送付してください。

提出先：学務部教育企画室（kykikakuk@tokushima-u.ac.jp　088-656-7679）

報告様式

「授業のチェック及び振り返り」シート

所属：（　　）
氏名：（　　）

1.「授業のチェック及び振り返り」を実施した授業の概要

授業名	
科目ナンバリング	
開講学部・学科・学年	
履修者数	
年度・学期または実施日	

2. 授業のチェック

次の項目のうち，自身の授業で実践している項目に✔を入れましょう。

① 予習・復習に関する情報のシラバス記載

□ 授業における予習・復習に関する情報を具体的にシラバスに記載している
→学生がどのような学修をどの程度行えばよいかを学生が理解できるように説明していることが重要です。したがって，「授業で学修したことを復習しておくこと」という記載では具体的に記載されているとは言えません。「自学自修を促すための授業ガイドライン」や「シラバス作成ガイドライン」の記入例を参考にして下さい。

② 課題

□ 具体的に何を学修すべきか，何を問われているのかを明確に示している
□ 課題を出す際には課題の目的を説明している
□ 学生の力量より少し高めの課題へと段階的に問題をシフトしている
□ グループ課題を設けている
□ 課題に対してフィードバックを行っている

③ 授業形態・授業での工夫

□ 学修する内容が学生の将来にとって必要であることなどを示し学修への動機づけを行っている
□ 資料や教材を授業開始前に配付している
□ ほぼ毎回小テストなどで学生の理解度の確認を行っている
□ 演習課題を与えている
□ 実験実習を行っている
□ 発表・ディスカッションを行っている
□ プロジェクトや調査を行っている
□ 授業や課題にスマホやデジタル教材を活用している
□ オフィスアワーなど学生が授業以外の場面で質問することができるように示している
□ 学生が授業終了後に「少し難しかった」，「十分に理解できなかった」という理由から学修しなければいけないと感じるレベル設定にしている

④ その他

□ 学生に授業外学修の振り返りをさせている
□ 過去の授業評価アンケートなどの結果から学生の授業外学修に関する取り組みを紹介している

３．自身の授業実践を振り返り，次の項目を記述しましょう

１．学生の自学自修を促すために実践したこと（具体的に）
２．実践の成果（学生の学修成果の向上に有効的であったこと）
３．実践の課題（学生の学修成果の向上に繋がらなかったことや阻害したこと）
４．次年度の授業で改善すること